

研 修 報 告 書

<p>調査・研究テーマ</p>	<p>文化創造都市実現に向けて～国際芸術祭と今後の課題～</p>
<p>目的</p>	<p>コロナ禍のため延期、短縮して開催されたさいたま国際芸術祭の総括を行い、今後の本市の文化醸成と創造都市実現にむけて調査するため。</p>
<p>内容</p>	<p>日 時：2021年1月22日（金） 13時00分～14時15分 場 所：さいたま市議会 第7委員会室 参加者：阪本 克己、添野ふみ子、高柳 俊哉、土井 裕之、三神 尊志、小柳 嘉文、小川 寿士、浜口 健司、富田かおり、出雲 圭子、松本 翔、佐伯加寿美 説明者：国際芸術祭公募キュレーター 戸塚 愛美 氏 報告書作成者：佐伯加寿美</p>
<p>概要</p>	<p>「文化創造都市実現に向けて」というテーマで、コロナ禍で延期、縮小されたさいたま国際芸術祭の総括及び今後の課題についてキュレーターの立場から戸塚氏のお話しをお聞きした。</p> <p>行政と市民をつなぐキュレーターという視点から国際芸術祭を振り返り、今後の本市の文化創造都市実現のためには、プロフェッショナル人材を確保することや第三者機関の創設などの必要性、戸塚氏が直接関わった市民プロジェクトの功績と今後の課題、人材育成についても言及された。</p> <div data-bbox="598 1585 1174 1966" style="text-align: center;"> </div>

<p>所見 ・ 成果</p>	<p>さいたま市では2016年に次ぐ2回目の国際芸術祭開催ということで、前回とは違い会場をメイン会場と別館にし、別館では開催前から「さいたまアートセンタープロジェクト」を定期的に行い市民サポーターが意欲的に関わり、気運を高めていく試みがなされた。</p> <p>また、コロナ禍で軒並みキャンセルとなったイベントも多くあったなか、当芸術祭は短縮とはいえ決行することで注目を集め、芸術的評価も高く、鑑賞時間がコンパクトで逆に鑑賞しやすかったという声もあった。</p> <p>一方で戸塚氏からは、一過性のイベント実施を目的とした設計が前提になっており、行政担当者の中にアートの専門家がおらず、招聘アーティストや市民との調整がスムーズにできなかったこと、市民サポーターは非常に積極的であったが固定化していた面があったこと、育成が浸透していなかったこと、アーティスト自体の働き方や雇用について改善していく必要があることなどを指摘された。</p> <p>会派として、会期初日に視察を行ったほか、市民アートプロジェクトへの参加、アーティストやキュレーターとの情報交換などを通じ以下の提案を議会で行っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政とアーティスト・市民をつなぐことに特化したプロフェッショナル人材の育成と確保 ・文化事業の担い手となる中間組織を外部に作る必要性（アーツカウンシルなど） ・アーティストが活動できる場の確保と雇用の確保 ・市民プロジェクトの継続と市民アーティストの育成、教育現場や福祉施設との連携 ・市民サポーターの拡大と継続的なグリップを専門家がコーディネートできる組織体制 ・今回できた人的ネットワークを継続的に生かしていくこと ・アーティストと企業をつなぐため、アートプロジェクトにクラウドファンディング型のふるさと納税を活用すること <p>文化都市創造条例に基づき、国際芸術祭を一過性のイベントとして捉えるのではなく、次への国際芸術祭にむけて効果的なブランディングを通じたまちづくりや文化芸術の土壌を醸成していく重要性を引き続き議会で質問していく。</p>
------------------------	---

本調査・研究を通じて得られた知見を活かし、令和2年度2月定例会における会派代表質問にて国際芸術祭および文化芸術都市創造に関する質問を行った。市執行部より、積極的な施策の推進や事業の改善を行う旨の答弁を得た。



会派基本政策

14 誰もが健康で心豊かに文化・スポーツにふれあえるまち

参 考

<参考1>

【令和3年2月定例会】

代表質問：阪本克己

「文化芸術都市創造に向けて」

(1) さいたま国際芸術祭2020についてについて

(2) 今後の文化芸術都市創造について